

---

# バカと幼馴染と、それからバトル

ちび

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカと幼馴染と、それからバトル

### 【Nコード】

N2633V

### 【作者名】

ちび

### 【あらすじ】

あらすじも何も完璧に未定です。申し訳ございません。

自分がやってる他のブログでも多重投稿する予定ですので、その旨をここに記載しておきます。

## プロローグ（前書き）

8月4日 『私立防衛機構第一学校』から『国立防衛機構第一学校』に修正しました。クソどうでもいい修正サーセン。

## プロローグ

「う、おっ!?!」

彼の頬すれすれを、物凄い勢いの拳が通過する。

( やっべ、コイツ初めて見たけど、かなりの手練…… )

「あぶっ!?!?!」

その拳を交わした後、彼が放った足払いを軽く前方に飛ぶことで回避し、相手は宙返りするような形で蹴りを放ってきた。動きの都合上、向かうのはつま先ではなくかかとだが。

もちろん、どちらにせよ当たればダメージである。

そのかかとを、腕をクロスして防いだ彼は、そのまま相手が自身の勢いでかかとを支点につんのめるのを認める。そのまま彼も、かかとに引きずられる形で地面に倒れこんでしまうのもまた滑稽というもの。

ドズン、と重量感を感じさせる着地音(決して華麗なものではない)を立て、二人は地面でもつれ込んだ。

「こ、んのおっ!」

「ちよっ、怒んなって」

がっしりと組まれた両手を、相手は怒りを以て押してくる。若干どころか、かなり彼の方が押されている状況だ。

彼は咄嗟に膝を突き上げ、鳩尾近くにそれが入る。ギリギリ鳩尾には入らなかったものの、不意打ちには十分だった。刹那などという短い間ではなく、一秒程度相手の力が完璧に抜ける。

これを好機と、彼は組まれていた両手を乱暴に振りほどき、自身だけ立ち上がる。当然だが、相手に手を差し伸べるような真似はしない。

むしろ、その真逆。

なぜか躊躇する様子があったが、彼はそのまま相手の横っ腹を蹴

り上げた。流石にこれには対処しようと、相手の手が彼の右足首を掴んだのだが、ぶん回されるように足が動き、手放すを得なくなる。「げ、ほっ」

滞空時間は、一秒にも満たない。流石にこの程度の時間では、空中で体勢を整える、といったこともできなかつたようだ。無様にも胸から着地。

空気を吐き出し、またも行動不能時間が相手に生まれる中、彼の方は相手を見ていなかった。視線はあらぬ方向にある。

その視線を受けるのは、綺麗なスーツを着込んだ、しかしそれがまったく似合っていないほどの、屈強な男。

男は彼の視線を受けているのを知って、反応を示さない。まだ、そのタイミングではない。

そんな戦いの最中とは思えないような行動をとる彼に対して憤激したのか、既にかかなりのダメージを負っているはずの体を無理やり起こし、咆哮を挙げながら相手が突進の構えをとる。

それに彼が気付いた時には、もう構えの段階から実行の段階へと移っていた。

「うおおおおあああああああああっっっ！！」

「うわっ」

完璧に気後れしている彼は、もちろん攻勢に出ることもなく、防御に回る。

結果、巨軀とはいかないものの、男として当然の体重を持つ相手の突進をまともに受け止める羽目となった。

そしてさらにその結果として、

「う、ごっ」

中肉中背、といった彼の体ではそれを耐え得ることもなく、あっさりと吹っ飛ばされてしまった。

もちろん相手は、それで止まるうとはしない。

突進の勢いを殺さず、そのまま地面を駆けて彼の下へと駆け寄る。だからと言ってけがの有無を確認するわけもない。そのまま馬乗り

になり、大きな掌で彼の首を締め上げた。

「つつつ」

口から出るのは息だけ。声が出ない。

彼も必死の形相で抵抗を試みていたが、次第にその顔が紅潮という危険信号を示し出し、後数秒で昏倒してしまふ　まさにそんな時。

ズン、と二人の体に影が下りた。

動かない首を動かそうとせず、目玉だけで彼がそれを確認すると、「勝負あり。大林啓太は敵戦地で、隙を見せた敵にまたがり、絞殺軍司正勝は自軍にて、無様な隙を見せ、敵に絞殺される。実践模試の結果は以上。異論は」

先ほどの男が、異様なほどの圧力を放ちながらそんな言葉を放っていた。

相手の方は不満一杯の顔をしていたが、口答えする様子はない。

彼の方は、既に首は解放されたものの、息がむせ返っておりそれどころではなかった。

「ないな。ならば、次の模試が始める。早く移動しろ」

言った直後に、「次い！」と男は声を張り上げる。すぐ後に、少し緊張した面持ちの男子二人が男の前に歩み出していた。

「くそつ……………」

非常に憎たらしげな視線を『敗者』に向け、『勝者』はその場から立ち退く。

「……………あ、あー」

『敗者』は、まだ地面に熱転がったまま、ようやく喉が通常の状態に戻ったことを確かめた。

(まつ、これで良いだろ)

内心、そう思いながら。

そんな彼の姿を、遠目から見ていた一人の女子は、

「……………はあ」

額に手を当て、天を仰ぎ見、

「またか」

呆れたように眩き、複雑な視線を彼に注いでいた。  
そして、次の『模試』が始まる。

ここは、国立防衛機構第一学校。

二千三十年現在、軍事国家と化した日本の持つ、最大の戦闘力である。

## 第一話

1

都内に建設された、他に類を見ないほどの大規模な学校。

国立防衛機構第一学校。

そもそもこれは、一般の学校が旨とする『生徒を教育する』ための機関ではない。

一応この学校の入学条件は、中学校の卒業である。つまり、入学条件自体は普通の高校と何ら変わりはない。

だが、この学校。生徒の年齢を平均化すれば、まず平均年齢は三十を超えるであろう。

もちろん普通の高校でも、そうなる可能性がないわけでもないが、常識的に考えれば十分以上におかしい数値である。

このおかしな数値が出る原因が、そもそもこの学校は教育を施すためのものではない、ということに起因している。

この学校は、第三次世界大戦 通称、世界狂乱 を経、結果的にほとんどの国が軍事国家と化し（日本も例外ではない）、そのため必要とされた『自衛隊を除くまともな戦力』を育成するための学校なのだ。

ここは、つまりはそういう場所なのだ、が……

カツカツカツ、と黒板にチョークで文字を書く音だけがこだまする教室。他の音を強いてあげるとするならば、生徒がノートをとる音くらいだろう。

これがこの学校での常識だった。普通の高校のように、居眠りする者や、隣の席の者と雑談を交わす者などまずいない。

それが、この学校での常識。



そして、その静寂が支配する教室の隣からは

「……一応、眠っていた理由を聞こうか」

「は。軍人たる者、体を休めることができる時に休めておくものと、自分はそう考えているからであります」

「要約すると、お前にとって俺の授業は、眠っても問題ないものだと？」

「そういうことになります」

ゴガン！ とあからさまな音が響く。

「えー、つまり銃弾の装填時が最も隙ができやすく、しかしその行為を省くわけにはいかない。そのため、基本装備に銃が指定されている歩兵は集団行動をとる。と言っても、もちろんこんなのは理由の一つにすぎないが」

隣の教室では、この学校の常識が物理的な音を立てて崩壊している。

（またあの名物生徒か……新米教師の面目も立たんだろうに……）

もちろんその教室にも先ほどの音は聞こえているのだが、未だに静寂は保たれているままだ。

そんな教室を見回し、その教師は隣の教師のことを呟った。

隣からはそんなことを思われているとも露知らず。

問題の教室を担当している男の教師は、自分の目を疑っていた。

自分は今さつき、居眠りしていた生徒に腹を立て、その顔を力いっぱい殴ったはずだ。

まあこの際、その行為の善悪やら何やらは置いておくでしょう。

まず常識的に考えて、人は殴られれば吹っ飛ぶ。もちろん吹っ飛ばレベルに殴る人間もそういないが、自分はそういう人間だ。

それなのに、自分の目には、何が映っている？

目の端辺りには、他の生徒が自分と彼を見て、薄笑いを浮かべている光景。なんと頭に来る光景だ。

では、目の中央より少しずれた辺り。

そこに映っているのは、教室の床。厳密に言えば、そこに飛び散った血。

始め自分は、その血は殴られた方が出したものだと思っていた。

逆だった。

殴った方……つまり自分の血だ、あれは。

何故わかるか？ もちろん自分は、人の血と自分の血の違いなんて分からない。

だが、自分の拳の痛みなら手に取るように分かる。当然だ、自分の体なのだから。

そして拳が痛みを訴えているのも、また当然だった。人を殴れば、殴った方も殴られた方も痛い。

だが、この痛みは当然とは言えないだろう。

もはやこれは、殴られた側の痛みと言うべきものだった。おかしな話である。殴った方の拳から血が出るのだから。

では、最後に真正面を見ると何が映っているか？

まず見えるのは、自分の腕と拳。その拳は皮が剥け、先ほど少しの血が出たばかりだ。

さて。その拳に殴られた生徒。

ギン、とまるで鷹のような視線でこちらを睨んでいる。

そう。睨んでいた。

こちらを真正面に見据えて。

簡単に言うと、こうなる。

俺に顔面を殴られた生徒は、しかし少しも怯むことなく、ついでに言えば少しもダメージを受けた様子もなく、殴られた運動を無理やり殺したのかどうしたのか、顔を真正面に据えてこちらを射殺するように睨んでいるのだ。

「……なっ」

やっと事態を飲み込んだ男の教師は、その生徒の視線に怯み、拳ごと体を引く。

そこで生徒の顔が露わになるが、やはり傷一つついていない。いや、ついていることにはついていない。が、それはいわゆる古傷だろう。どう見たって拳でつくような傷ではない。

絶句している教師に向かって、生徒は口を開いた。

「別に殴られたことをどうこう言うつもりはありません。が、早く授業を進めてはどうでしょうか？ 自分はともかく、他の生徒は迷惑かと」

問題の他の生徒とやらは、先ほどから彼らのやり取りを見てニヤニヤしているだけなのだ。もちろん、このシチュエーションを楽しんでいるのだろう。悦乐的に。

（な、なんなんだ、こいつ……）

冷や汗を流しつつも、もうこんな生徒に関わる気は失せたのか、その教師はそそくさと黒板の前に戻る。

（殴られた運動を殺す？ ば、バカ言っな……受け流すことなら俺だってできる。いや、殺すことだってできる。が、やったらどうなる？）

可能と実行では、わけが違う。

もし今の自分の拳の運動を、無理やり殺したとするなら……

（……首の骨、折れるだろ）

ゴクリ、と生唾を飲み込む音が無残にもその教室に響いた。それを聞き、やはり生徒たちの顔がニヤける。ビビってる、とても思われているのだろう。

実際、そうだった。

（これがビビらないでいられるわけないだろ……首に殺した運動の負荷がかかって、ポックリ逝っちまうっての、普通だったら）

もはやプライドもへったくれもなく、その男は先ほどの生徒を恐

る恐る振り返る。

既に机に突っ伏していた。

それに安堵を感じていることにも気づかず、

(……ってか、あいつに限った話じゃないが……)

そういえば俺はさっきまで何の話してた、と今更ながら焦りつつも、彼は思わずにはいられない。

その背中に刺さる視線を感じつつ。

(こいつら……全員成人してないだろ……!?)

何なんだこの教室、と思いながら、どうにかしてその新米教師はその授業を乗り切った。

後になってその教師は知るのだが、やはりというか、その教室は普通のクラスではないらしい。

曰く、発現特化クラスだとか。

詳しいことは聞けなかった。機密事項らしい。

とりあえずあんな教室を受け持つのは二度とごめんだ……あの教室の授業のときは、仮病でも使うか……?

バカなことを考えつつ、その新米教師は次の授業へと疲労感たっぷりな様子で向かっていった。

## 第一話（後書き）

はい。遅れましたやっと第一話です。

とりまブログ的な存在してます。まだそちら見てない、って方は良ければそちらも。

今後も気まぐれ更新だとは思っているので、ご了承ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2633v/>

---

バカと幼馴染と、それからバトル

2011年8月14日03時28分発行